（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　新谷　淳一

「文学とは何か」という問いは、しばしば時代と地域を越えた文学の本質に関する問いとして発せられる。しかし本論文は、フランスにおいて「文学 littérature」という語が歴史的に大きな意味の変遷を経てきたばかりでなく、そもそも今日、「文学」の名で呼ばれる文筆活動を人間の知的活動の一領域ないしカテゴリーとして包括的に示すタームが、18 世紀半ば以前は存在せず、辛うじて「文芸 belles-lettres」という用語が、「文学」に近似する領域と活動を意味していたことに着目する。伝統的な一国文学史は、19 世紀以降に成立した文学の概念を過去に投影して、国の文化的威信の証拠・証言としての作家と作品の連なりを叙述する傾向がある。それに対して本論文が探究の対象として取り上げるのは、「文芸」から区別され、フランス大革命を主要な契機として成立した「文学」であり、一方では、その成立基盤を歴史的に解明すること、他方では、19 世紀以降の文化状況において「文学」が占める場所と果たす役割、隣接する他の精神活動（芸術、歴史、政治、社会科学）と取り結ぶ関係を検討することを通じて「文学」の意味と価値を画定することが、論文の課題となる。この課題に取り組むにあたって、本論文は、類似の問題意識に基づいて独自の文学論、美学論、政治論を展開してきた哲学者ジャック・ランシエール(1940-)の仕事、特に『沈黙する言葉』(1998)の主張とそれを背後から支える理論的前提、とりわけ文芸と文学の対比をより広い立場から捉えなおした「表象の体制」と「美感的体制」という枠組みをつぶさに検証することを通じて問題に迫っていく。この意味で本論文は、テクストの緻密で執拗な読解に支えられた作家研究の側面も備えている。

全体は、論文の問題意識と問題設定を提示し説明する「序」および「序章」、本論四部二七章、結論、文献表からなる。第一部「表象からの脱却」は、「表象の体制」がいかなる体制であったかを説明するとともに、それがどのような変化を蒙り、やがて「美感的体制」に転換するかを、ドイツ初期ロマン派とフランスロマン派の親近性に着目して跡付ける。第二部「自然・アート・歴史」は、「美感的体制」の成立を可能にするエピステーメーのあり方が、標題に登場するターム=概念の歴史的変遷を追及することを通じて探索される。そして表象の体制からの転換は、たんに文学あるいは芸術の分野における転換にとどまらず、「一」と「多」あるいは「可知的なもの」と「可感的なもの」の関係をめぐる政治哲学上のパラダイムの変換に連動していることが示唆される。第三部「エクリチュールの戦い」は、フランス革命を契機として形成された近代社会、すなわち民主主義を指導理念とする社会において、文筆活動が文化的使命にとどまらず、政治的課題さらには宗教的欲求まで抱え込むことによって、近代的な意味での文学と歴史および社会科学の形態を取ったとい

う見方を打ち出す。そして表象の体制の崩壊とともに語るべき高貴な主題を失った文学に対して、歴史と社会学が、一方は自然ないし現実への密着、他方は実証性を梃子にして、社会に意味を与える作業に乗り出し、「もの」と一致しない空虚な言葉を発する文学を排除しようとする戦いが描かれる。第四部「文学の矛盾の作品化」は、一方では現実、他方では社会科学の狭間にあって、自らの働きを現実にも実証性にも基礎づけられない文学が、作品として成立したときに抱える矛盾をむしろ積極的に評価し、言葉の「空虚さ」の効用を、「文学の絶対化を象徴する」三人の作家、フロベール、マラルメ、プルーストに則して検証する。作品の媒体の物質性に大きく依存することのできる美術や音楽と異なり、文学はその媒体の貧しさのゆえに、絶えず作品の必然性を検証するように強制されるが、それこそ文学の強みであるとするランシエールの立場を論者自身が引き受けることで論文は終結する。

本論文は、根源的で射程の大きな問題意識に導かれ、人文科学に関する幅広い博識を駆使して、近代的な意味における「文学」の成立基盤、意味、価値について清新で興味深い主張を打ち出している。ランシエールの仕事の注解という体裁を取るために、細部の議論が増殖して全体の見通しが悪くなっている点、あまりにも論点が多岐にわたるために、そのすべてを統御しきれない印象を与える点等、いくつかの問題点は残されているが、たんにフランス文学の領域を越えて、広い意味での文学の基盤を問い直す野心的かつ独創的な論文に仕上がっていることは確かである。以上から、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。